

リスクをとった挑戦で得られる効力感と

人のために行動できる利他性を育む

海城のコミュニケーションプログラム

進路実績の背景に 身体を使った体験学習が

海城中学高校は中高一貫の男子校だ。今年度の現役大学合格状況は東京大が43人、医学部が63人と、例年以上に高い実績をあげた。その理由について、校長特別補佐の中田大成先生はこう語る。

「この学年の生徒は、特に勉強だけ熱心だったわけではなく、さまざまなことに前向きにチャレンジしていました。そうした姿勢が大学受験にもあらわれ、リスクをとって最後まで強気で押し通した結果、難関大学の合格を引き寄せたのでしよう」

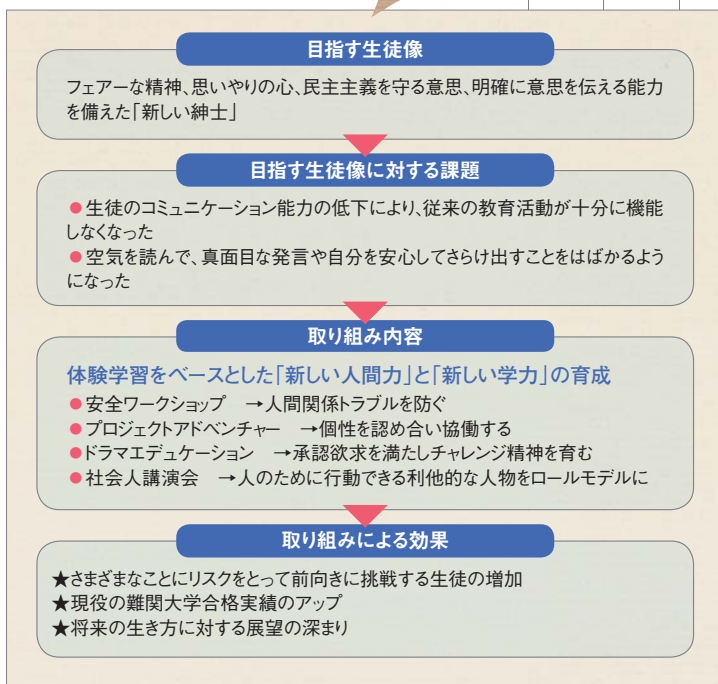
同校は大学合格実績だけを追っている学校ではない。創立100周年を機に1990年代から学校改革を行い、「国家・社会に有為な人材を育成する」という建学の精神のもと、目指す人材像をリベラルでフェアな精神をもった「新しい紳士」と設定。その実現のため、人と共生・協働できる「新しい人間力」と、課題設定・解決につながる「新しい学力」の育成に取り組んできた。

進化させている。学校改革の第一段階では、体育祭を縦割りチームで実施するなど、学校行事や生徒会活動、部活動などを見直し、生徒の自己肯定感や自己効力感につながる活躍の場を整えた。しかし、2000年代になるとそうした場が十分生かされなくなり、新たな対応が必要となった。

「コミュニケーション能力の低下から、異学年のかかわりが希薄になったり、生徒同士が対立するなどの問題が起ったり……。あるいは真面目な発言を冷笑する雰囲気の中、生徒たちは空気を読んで自虐的な発言をすることで身を守るようになる……。こうした状況を打開するには、コミュニケーションやコラボレーションを体験的に学ばせる必要があると考えました」(中田先生)

そこで、中学段階を中心に、身体を使って仲間と取り組む体験学習を導入。現在、不快感を与える行動について考えさせる「安全ワークショップ」、屋外施設でコミュニケーションやコラボレーションを体験する「プロジェクトアドベンチャー」、演劇的手法を用いた「ドラマエデュケーション」の3種類を実施している。

海城中学高校 の取り組み



安心して自分を出せる環境を 体験活動を通じて作る

「安全ワークショップ」では、校内でお互いが快適に生活するために、どのようなことが大切なのかを体験的に学ぶ。中学1年の各学期始めに計3回実施し、入学後早い段階で各自が日常の行動をとらえ直すことにより、人間関係のトラブルを事前に防ぐ。

「プロジェクトアドベンチャー」はアメリカで開発された体験型プログラムだ。中学1・2年で各1回、体験型学習施設に出掛けて実施する。屋外で行うさまざま

なアクティビティから、コミュニケーションの大切さや、体格差などの特性をプラスに生かして組み合わせることの価値、そしてチャレンジは1人でするものではなく信頼に裏打ちされたサポートが必要なことなどを学習。ありのままの自分を肯定し、生徒同士の個性を尊重する安心・安全ベースを整えている。

「ドラマエデュケーション」では、グループで演劇作品を作って自ら演じる。中学2年は「初めて会う大人」の体験談、中学3年は修学旅行をモチーフにして実施。能動的に創意工夫したことが周囲に認められた経験により承認の欲求が満た



体験学習推進
委員会委員長
中村陽一先生



校長特別補佐
中田大成先生

学校data

1891年創立 / 普通科 / 生徒数1929人(中高の合計・男子のみ) / 進路状況(2015年3月実績) 大学190人・進学準備86人

プロジェクトアドベンチャー

仲間と共に課題をクリアしていくプロジェクトアドベンチャーでは、コミュニケーション能力やコラボレーション能力を高める。



丸太の上で無言のまま生年月日順に並び直すアクティビティでは、背の低い生徒はしゃがんで背の高い生徒を移動させるなど、お互いの特性を知った上でどう生かすかを考える。よいところを引き出し組み合わせることで、高いパフォーマンスが出せることを知る。



10m以上の高所で綱を渡るアクティビティでは、命綱を支える仲間を信頼してこそ、勇気を出して綱を渡れる。人は困難にチャレンジする時、目に見えなくても信頼できる誰かの支援が必要であり、それには日常から人間関係を築くことが大切だと知る。



中学2年は、近隣の商店街の店主など「初めて会う大人」の話を書き、演劇作品を作る。保護者や教員など身近な大人とは異なる価値観に触れ、どんな人生でもかけがえのないことを知る意味も。

中学3年は、修学旅行をモチーフに演劇作品を創る。創意工夫してしっかり相手に伝えることができたという成功経験が、自分の未来についても、一生懸命取り組めば思う方向に進むかもしれない、挑戦してみようという効力感に。

ドラマエデュケーション

ドラマエデュケーションはプロの演出家など外部講師の協力により実施。グループで演劇作品を作って自ら演じることを通じて、共同で作り上げる楽しさを味わう。



安全ワークショップ

外部インストラクターの協力により、電車の中の迷惑行為の演技を見たリ、コミュニケーションゲームを行ったりして、通学路や教室における自分の行動をとらえ直す。



され、困難にも挑戦していこうという意欲につながる。

教員のファシリテーションのポイントについて、体験学習推進委員会委員長の中村陽一先生はこう話す。

「偶発性や偶発性をはらむ体験学習では、生徒自身が臨機応変に対応していくことで、教員の想定を上回るものを学び取ることができません。しかし、活動の目的を限定し過ぎたり、必要以上に指示するなど、教員が予定調和の方向に導いてしまうと、生徒の学びを狭めてしまふ可能性も。生徒側から出てくるものをじっと待つ姿勢が大切でしょう」

キャリアガイダンス講演会の感想

講師：株式会社ドリコム代表取締役・内藤裕紀氏

○会社をつくりたいという思いの原点は子どものころ、夏休みの宿題で貯金箱を作って褒められたことであり、その後も中学・高校のころ頑張ったことと合わせ、ずっと貯金箱が支えとなり続けたという。(中略)内藤さんの、「できる前提で物事を考えると世界が開ける。できないと決めつけない。一步を踏み出せ。日本では基本的に死なないから」という言葉にとっても感動した。ぼくは今まで、自信を持ってなかったことによって後悔してきたことが何回もあった。この言葉聞いて、もっと自信を持たなければならぬと改めて強く思った。内藤さんは人が成長していく様子を「雪だるま」に例えていたが、ぼくも「貯金箱」のような自分を支えてくれるものを思い出し、勇気をもって小さな一歩を踏み出し、その小さな「雪だるま」を大きくしていきたいと思う。

○(前略)内藤氏は仕事をする目的はお金と名誉を得るためだと明快に説く。起業家社長という職業はその両方を最大限手に入れられることを示唆する一方、世の中をよくするために何かを發明して未来を創ることが社長の仕事だと熱く語ってくれた。そこには、起業により雇用を創出し、税を納め、日本の社会の発展に貢献するというビジョンが感じられた。(中略)景気動向を心配するより、自分が社会にでて日本の経済をよくするのだというくらいの気概を持ってほしいのだと心を改めた。「できないことは何もない」。今日、私は挑戦する心、ベンチャー・スピリッツをしっかりと胸に刻んだ。

**自己肯定感をもって
利他的な行動ができる人へ**

高校では年間2〜3回のキャリアガイダンスの中で社会人講演会やOBシンポジウムなどを実施する。中学時代にも体験学習を通じてさまざまな大人と接するが、高校でも社会で活躍するロールモデルとの出会いを設定。他者の挑戦や活躍から「代理体験」をすることで、「自分にもできるのではないか」と自己効力感に働きかけている。昨年度のキャリアガイダンス講演会では、IT企業を起した同校卒業生を招き、中高時代

のエピソードや起業のきっかけ、仕事に対する思いを語ってもらった。

「彼を招いたのは、単に優秀な経営者であるだけでなく、難病にかかった経験があるからです。彼は病気を通じて「社会に貢献したい」という思いをもつようになり、中高生向けのキャリア教育にもボランティアで取り組んでいます。そんな彼の姿を1つのモデルとして、自分のためだけになく、利他的な行動が自然にできる人になってほしいと願っています」

(中田先生)

講演会を聞いた生徒は、それぞれ勇気を出して挑戦することの大切さや社会貢献の意義などを学んだ(コラム)。こうして段階的に自己肯定感や効力感を高め、将来の生き方を展望し、「新しい紳士」として巣立っていく。

Editor's Eye

リーダー育成を目指す学校の参考に

同校入学者には少なくとも「難関の中学受験を乗り越えた」という成功体験があり、比較的、自己肯定感の高い生徒が多い。しかし、他人を思いやり社会のために行動できる人を育てるため、自己肯定感・自己効力感を高めることから始めている。社会を担うリーダーの育成が求められる進学校では、生徒の自己肯定感の低さが大きな問題となっていないまでも、同校の取り組みは参考になるだろう。